

森の緑は日に日に濃くなり、吹き渡る風も緑に染まりそうです。里山では陽気なカツコウの歌がひびき、道端には真っ白な野バラの花が咲いて―あだたら高原に初夏がやって来ました。

さて今回は、岳で生まれ育った、二人の仲良し少女達のお話です。

今から八十年ほど昔のこと―岳温泉の西の山を越えたところに、小さな開拓村がありました。

その村の子供・フキとみどりは同じ年で、小さい頃から大の仲良しでした。いつもいっしょに山を越えて学校に行き、帰りはかまどを焚きつける杉の枯葉を拾ったり、春は山菜を採ったり、秋は栗を拾ったり、きのこを集めたり…家の助けになることも、ふたりには楽しい遊びでもありました。

ふたりのユビきり

やがて、ふたりは小学校の卒業の年を迎えました。昔―太平洋戦争が終わって、新しい学制が決められる前まで―は、小学校の六年生を終えると、多くの子供は、奉公に行ったり、家業を手伝ったりしたものです。フキもみどりも、家の手伝いをする事になっ

ていました。

岳の山に、金色のマンサクの花が咲く頃、ふたりは卒業式にそろって出かけましたが、いつも陽気なみどりがふさぎこんで歩いていきます。帰り道も、みどりはうつむいたまま…。

「なじよしたの?」心配したフキがたずねると、みどりはたちまち、目いっぱい涙をうかべて「あんな、おら家、みんなでブラジルっていうところに行くんだ…。その国で働くんだ。」フキは「ブラジル」なんて聞いたこともありません。その国にみどりの一家は、移民するのだそうです。

フキとみどりと人形メリー・アンのお話



家―父親、母親、みどりと八歳の弟は、旅立っていききました。さて、ブラジル行きの船に乗るために横浜の港に着いたみどりの一家は、出航直前に思いがけない足止めをされることになりました。出発前の身体検査で、みどりの弟が「トラコーマ」という眼の伝染病にかかっていることがわかって、乗船を禁止されたのです。トラコーマは昔、農村の子供がよくかかった眼病で、いろいろかまどの煙がもとだろうと、大人はそれほど深刻な病だとは考えていませんでしたが、大勢の客を乗せて三ヶ月以上はかかる長

「ブラジルって遠いのが?」「うん、海のずうつとずうつと向こう。遠い遠いとこだと。そこさ行ったら、はあ、フキちゃんと会えなくなるな」みどりはわっと泣き出しました。「いや、会えるよ。生きていればきつと会える。」フキはみどりの肩を抱いていいました。「んでも、何日も何日も船で行く、ほんとに遠い国なんだよ。」「大丈夫だ。ふたりともきつと生きていくべ」「んじゃ、約束だ。いつかきつと会えるな」「うん、約束だ。ユビきりすっぺ。」

ふたりは固いユビきりをしました。それから十日ほどして、みどりの一



い船旅では、伝染病が大敵です。―次のブラジル行きの船が出るのはそれから三ヶ月後と告げられて、みどりの一家は途方に暮れてしまいました。

た。見ず知らずの都会・横浜で、次の船を待つことになりました。

一家は、小さなアパートを借りて、親戚中から借り集めた渡航費を守りながら、暮らさなければなりません。

みどりの父親は、港に出入りする船の荷揚げを、母親は港の食堂の下働きをしながら、その日をしのぐことになりました。そしてみどりは、一家の事情を聞いたアパートの大家さんの世話で、港町の山の手にある洋館のお屋敷の手伝いに行きました。

お屋敷は、みどりが生まれて初めて見るものばかりで、―とくに客間は、立派なソファやテーブルや椅子、きれいなシャンデリアがあって、まるで物語の中の部屋のようなです。みどりは目をまん丸にして仕事の手を止めて、ため息ばかりついているので、時々、奥様に叱られました。

ある日、奥様の片付けものを手伝っていたら、「捨てておいて」と渡された大きな箱の、布切れや古本などに混じって、西洋人形が一つ、入っていました。見ると、栗色の巻き毛はあちこちはげ落ちて、耳たぶの片方は割れ、足は付け根から外れるばかりにブラブラ…右手の人差し指は欠けてなく、ピンクのドレスもフリルのついた白い工ブロンもすっきり色あせています。くすんでしまった青色の眼、固く結んだ小さなくちびるが、悲しそうに淋しそうで…みどりは思わずその人形を抱き上げました。「ああ、それね、私たち

がこの家を買って越してきた時……そうね、三十年ぐらいい昔ね、その時から戸棚の奥にあったのよ。前はイギリス人が住んでいたそうだから、きつと忘れていったのね」という奥様に、みどりは思い切っていました。「これ、私がもらったいいですか」。奥様は「ええ、いいわよ。こんなボロの人形でよかったです」と笑いました。

ふと気がつくと、人形のエプロンの端っこにMerryとピンク系の縫い取りがあります。「これ何ですか?」とみどりが奥様にたずねると「ああ、メリーね。この子は『メリー』っていう名前なのよ、たぶん」と奥様は言いました。「きつと、この人形の持主がお母さんに刺繍してもらったのねえ」その日から、メリーは、みどりの宝物、大事な友だちになりました。一日の仕事が終わってアパートに帰ると、真っ先にメリーに声をかけて、その日のできごとや、なつかしい岳の村のこと、大親友のフキのことを話しておりました。

西洋人形・メリー、横浜から

一方、フキは、野菜や野の花をリヤカーにのせて、温泉まちに行商に行くようになりました。木の根や藪だらけの土地をクワクワ掘り起こす開拓の仕事は、少女ががんばってもあまり役に立たないので、それは両親や二人の兄に任せて、「おらは、商売で稼いでくる」と、フキが自分で始めたこと

でした。フキが持ってくる採り立ての野菜や山菜、野の花が評判で、旅館の女将さんたちや泊り客が楽しみに待つてくれるようになりました。

「みどりちゃん、今ごろ船に乗ってっぺなあ」フキは折にふれてみどりを思いながら、毎日を送っていました。みどりも「フキちゃん、どうしてっぺなあ、おらがまだ日本にいるのがわかったら、たまげっぺなあ」と思いな



がら、過ぎていきました。

それから三ヶ月がたった頃、フキ宛てに小包が届きました。横浜の消印があり、送り主は「みどり」とあるだけですが、おどろいて開けてみると、フキが絵本でくり見たことのない、西洋人形が入っていました。いっしょに小さな紙切れが入っていて、「人形の名前はメリー。よろしく。みどり」と走り書きがしてありました。

フキは、どうしてみどりからこの人形が送られてきたのか、不思議でした

が、メリーがすっかり好きになりました。「なんだべ、こたボロの人形……しかも愛想のねえ顔して」と母親は苦笑いしましたが、その日からメリーは、フキの大切な友達になったのです。

一方、みどりは、待ちかねた船出がいよいよあさつてに迫って、忙しく乗船の仕度をしていました。大事なメリーを荷物に入れようとした時、父親が厳しい顔でいいました。「船にはよけいな荷物は一切、持ち込めねえぞ。そだ人形、捨ててこい」みどりは泣きながら荷造りして、郵便局に走りまわりました。お屋敷で働いた給金は親にそっくり渡していましたが、少しだけ自分のために取っておいたお金が役に立って、送り賃がなんとか間に合いました。一こうしてメリーは、横浜から岳にやってきたのです。

それからまた一年がたちました。みどりからは何の知らせもありませんでしたが、「きつと、元気でブラジルにいるんだべ」と、フキはフキで行商に精を出していました。

毎日、へとへとになって家にたどりつくと、メリーが待っていてくれるのが、フキのなぐさめでした。でも、いつもメリーを見るたびに、そのボロボロになった淋しげな姿がかわいそうになりませんでした。

「人形工房」とアンさん

ところで、開拓村と温泉まちの境

に、廃屋の跡らしい、雑木やヤブが茂る小さな空き地がありました。入り口に大きな古い木の切り株があったので、フキはいつも行商の帰りに、それに腰かけて、一休みしていました。

「そんなある日、フキがいつものようにその空き地にさしかかると、ヤブの奥に何やら小さな家が見え隠れしています。「あれえ、こた家あったけが?」不思議に思っつてそつと近づいてみると、入り口らしいガラス戸に、小さく「人形工房」と書いてあります。フキがおそるおそる戸を開けてみると、目の前に小さな机があって、人形の体や顔のスケッチや、白い土やきれいな布や、髪の毛になるらしい金色や栗色の細い糸などが置いてあります。

フキがそれに見入っていると、奥からエプロンをつけた女の人が出てきました。ほっそりと背が高く、明るい茶色の瞳とほんのりピンクのほお、栗色の髪を後ろで束ねた、きれいな人です。びっくりして突っ立っているフキに、女の人はほほ笑んでいいました。「お人形は、新しく作るのですか?それとも修理でしょうか?」

フキは、「修理です。私のメリーを直してもらいたい」と答えました。女の人は「そう、では、明日、その人形をここに持ってきてください」といって、「せつかく来てくれたのですから、ちょっと休んでいって」奥の部屋に行った女の人は、しばらくすると、銀色のきれいな盆にお茶をのせて

きました。美しい花模様の器に入った琥珀色のお茶は、フキが生まれて初めて飲む「紅茶」というものでした。女の人は、その紅茶に金色の「ジャム」というものを入れてくれました。「これ、アンズのジャムなのよ。私、大好きなの」とその人のいうジャムは、甘くてほのかに酸っぱくて、フキも一口で大好きになってしまいました。

フキが自分のことやみどりのこと、思いがけなく送られてきた人形のことを話すと、その人も自分のことを話してくれました。

「私の父はイギリス人で、母は日本人。父は、横浜で貿易の仕事をしていただけけれど、私が三歳の時に事業に失敗して、それからすぐに亡くなったの。だから、私は父の顔もよく憶えていないわ。そのあと、母は、住んでいた家を売って、私を連れて、トランク一つで東京に行ったんですって。小さかったから、何もわからなかったけど、母がひとりで働いて私を育ててくれたの。私は、あいの子」って、いじめられたけど、自分の茶色の目や茶色の巻き毛が好きだったわ。そう、今もね。母は、私が十八の時に亡くなって、それから私、ひとりぼっちになったの。…そしてどうしたかって、そうね、ずうっとずうっと遠い昔で、忘れてしまったわ」とその人は静かにほほ笑みました。「そうそう、私の名前はアン。日本語では、杏」と書くの。」

「ジャムなんだね」とフキがいうと、その人は声を立てて笑いました。

「こうして、アンという人と楽しいひとときを過ごしたフキは、翌朝、メリーを抱えて、その小さな工房に飛んでいきました。

メリーを一目見た女の人は、人形をそっと抱きしめると、目にいっぱい涙をためました。不思議がるフキにその人は「いいえ、こんなにポロポロになって、かわいそうなんですもの」と、エプロンで涙を拭きながら「明日の夕方、ここにいらっしやい。それまでに



きれいに直しておくわ。」と、奥の部屋に消えていきました。

「そして、待ちに待った夕方、フキはまっしぐらにあの工房に駆けていきました。

でもそこには、あの小さな工房は跡形もなく消えていて、いつもの木立とヤブと切り株があるばかり…。ふと見ると、切り株の脇に、茶色の古びた紙

袋が置いてあります。一開けてみると：みちがえるようにきれいに新しくなったメリーがいます。こぶしの花のような白い顔、澄んだ青い眼、輝くような栗色の巻き毛、真新しいピンクのドレス、赤い靴、フリルの付いた白いエプロンの端には、ピンクの糸で、Merryの縫い取り…。

気が付くと、袋の底に小さな紙切れが入っています。そこには「メリーは、私が小さな時に遊んでいた人形です。大事にしてくれてありがとう。フキちゃん、みどりちゃんの幸せをお祈りしています。Ann/杏」

あたりを見渡しても、何一つ前と変わらない景色で、遠くで小鳥の音が響くばかりです。フキは、メリーを抱きしめて泣きました。なんだか、体の奥底から、悲しみとあたたかい気持ち湧き上がってきて止まりません。

新しくなったメリーに、フキはアンという名前を付け足して、「メリー・アン」としました。それからこの人形は、フキのもっとも大切な宝物になったのです。

そして、ひと月が経ちました。フキがいつものように古い切り株の前にさしかかると、朽ち果てた根の脇から小さな細い枝が新しく伸びて、緑の芽を吹いています。二月、三月と経つうちに枝はどんどん伸びて、いつしかフキの背丈を越えるようになりました。

翌年、その若い枝はピンクの花を咲かせました。年寄りたちが「杏の大本

が生き返った」と驚いているのを知って、フキは、アンはあそこに生きている、と思いました。

初夏になると、その木は金色の杏の実をいっぱい付けました。フキは、その実を拾って食べながら、アンがごちそうしてくれた、楽しいお茶のひとときを繰り返す思い出すのでした。

さてそれからまた月日が流れて、フキは十九歳になりました。相変わらず行商をしていましたが、温泉まちで一、二を争う大きな旅館の次男坊の勝次が、いつもフキが行くのを待っていて、野の花をどっさり買って来て「今日の売れ残りは何だ？」と「完売」に協力してくれたりしていました。周りの人たちは、「勝次はフキちゃんに惚れてるよ」とかかっていましたが、フキも、やさしい勝次が好きでした。

ある日、リヤカーを引いていつもの杏の木の下にたどりつくと、そこに大真面目な顔の勝次が待っていました。びっくりするフキの前に、気を付けて、勝次は「フキ、おれの嫁に来てくれねが？」といました。フキは黙って、こっくりつなづきました。

その時、さあっと初夏の風が渡って、金色の杏の実がパラパラとふたりにふりかかりました。「ああ、アンさんが喜んでくれる…」とフキは思いました。

勝次の両親も、働き者で気立てのい

いフキをたいそう気に入ってしまいましたので、二人の結婚を喜んで、温泉まちの奥に、旅館の分家を出してくれまいた。宿の名前は、フキが「杏花亭にしたい」といいました。勝次は「うん、おれがおめに、嫁にきてくれっていったのは、杏の木の下だったからな」と満足気でしたが、フキは「秘密」をそっと抱いて、「いい名前だべ」とほほ笑みました。夫婦の部屋の小さな床の間には、メリー・アンがちよこんと座らせられていました。

六十歳の再会

それからまた、長い年月が経ち、フキもみどりも六十歳になりました。夫婦が一生懸命働いたおかげで、「杏花亭」は大繁盛で、大女将になったフキは、息子夫婦に孫五人というにぎやかな毎日を過ごしていました。

そんなある日、フキ宛てに一通の航空便が届きました。なんと、四十八年ぶりの、みどりからの手紙です。封を切るのもどかしく、読んでみると、みどりは、夫婦で「コーヒー園」の農場主になっていて、五人の息子とお嫁さん、孫十六人という大所帯で、毎日、コーヒ豆を育てているとのこと。同封された写真には、真っ黒に日焼けして、元気いっぱいのみどりと大勢の家族の笑顔がありました。「いつか、きつと会っべな」と手紙は結んでありました。そして、追伸に「メリーは元気にしていますか」とありました。そ

の晩、フキは、長い長い返事を書きました。

そして、次の年、あの杏の樹に花が咲く頃、みどりから国際電話が入りました。まだ、元気なうちに会いに行く、



「この子、今はメリー・アンっていうんだよ」「なんで?」「ま、なんとなく可愛いべ」「ふうん」一ふたりのやりとりを、メリー・アンがほほ笑んできいていました。

「あ、淋しげなメリー・アンがほほ笑んでいるではありませんか。そして、眼がきらきらして、ほおがバラ色に染まっています。」「ああ、あんたもうれしいんだな」

「みどりは、メリー・アンを抱きしめて、ぼろぼろ泣きました。そしてついに、ふたりの「ユビきり」の約束が果たされました。少女の頃に

帰って、わあっと泣きながら抱きしめ合うふたりの、うれしいうれしい姿を岳の高い空が見守っております。

「ふうん、そだべな。あの時、淋しくて悲しかったもんな」フキはそういって、もう一度、メリーを強く抱きしめました。

「その子、今はメリー・アンっていうんだよ」「なんで?」「ま、なんとなく可愛いべ」「ふうん」一ふたりのやりとりを、メリー・アンがほほ笑んできいていました。

アンの樹の下で

そしてまた、長い月日が経ち、フキもみどりも八十歳になりました。あの杏の木は大木になって、毎年花を咲かせ、金色の実をたわなに付けました。フキは、その木の下で過ごすひとときが幸せでした。そして、初夏には、金色の杏を拾い集めて上手にジャムを作

りました。そのジャムが入った紅茶を、テーブルに座らせたメリー・アンと一緒に楽しんでる姿を、家族は、不思議がりましたが、これもフキの幸せな秘密でした。

みどりは、みどりで、コーヒー園を見渡すベランダに座って、メリーをまん中にフキと撮った写真を眺めて過ごすのが一番幸せなひとときでした。

それからまた長い年月がたって、フキもみどりも百歳近い天寿を全うしましたが、フキの宝ものとして杏花亭に大切に遣された、メリー・アンのほほ笑みとバラ色の頬は、あの時のまま消えることがなかったということです。

岳の里山のどこかで、初夏の風にゆれる杏の大木を林で見かけたら、それは多分、アンの杏の樹です。

岳温泉 野の花一輪香る宿

政府登録旅館



扇や

あだたらの宿

福島県二本松市岳温泉1-3
TEL.0243(24)2001 FAX.0243(24)2004

扇やペア宿泊券
をどうぞ

●大切な方、親しい方へのあったかいプレゼントに、扇やのペア宿泊券(お2人でご1泊3万円)はいかがでしょう。